

招待席

泉 鏡花

いずみ きょうか 小説家 1873.11.4 - 1939.9.7 石川県金沢市に生まれる。 帝国藝術院会員。 日本語表現の魔術的と賞賛された天才の一人で、古今独歩の美しい幻想境を歩む一方、愛憎の念と共に日本の虚栄虚飾社会に批評の視線を鋭く刺し込み、自ら弱者との共同歩調を生涯堅持してやまなかった。 掲載作は明治二十九年(1896)十一月「文藝倶楽部」初出。鏡花のかかえた多彩で深い課題をみごとに集約した初期の傑作。

龍潭譚

躑躅か丘 鎮守の社 かくれあそび あふ魔が時 大沼 五位鷺
九ツ餅 渡船 ふるさと 千呪陀羅尼

躑躅か丘(つゝじがをか)

日は午(ご)なり。あらゝ木(ぎ)のたらたら坂に樹の蔭もなし。寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟(さしはさ)みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひて、たゞ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき処に見ゆ。谷には菜の花残りたり。路の右左、躑躅(つゝじ)の花の紅(くれなゐ)なるが、見渡す方(かた)、見返る方、いまを盛(さかり)なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。

空よく晴れて一点の雲もなく、風あたゝかに野面(のづら)を吹けり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいひたりしを、肯(き)かで、しのびて来つ。おもしろきながめかな。山の上の方(かた)より一束(ひとたば)の薪(たきぎ)をかつぎたる漢(をのこ)おり来(きた)れり。眉太く、眼の細きが、向(むかう)ざまに顛巻(はちまき)したる、額のあたり汗になりて、のしのしと近づきつゝ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、
「危(あぶ)ないぞ危(あぶ)ないぞ。」

といひずてに眦(まなじり)に皺を寄せてさつさつと行過(ゆきす)ぎぬ。

見返れば八ヤたらたらさがりに、其肩(そのかた)躑躅(つゝじ)の花にかくれて、髪結(かみゆ)ひたる天窓(あたま)のみ、やがて山蔭(やまかげ)に見えずなりぬ。草がくれの径(こみち)遠く、小川流るゝ谷間(たにあひ)の畦道(あぜみち)を、菅笠(すげがさ)冠(かむ)りたる婦人(をんな)の、跣足(はだし)にて鋤(すき)をば肩にし、小さき女(むすめ)の児の手をひきて彼方(あなた)にゆく背姿(うしろすがた)ありしが、それも杉の樹立(こだち)に入(い)りたり。

行く方(かた)も躑躅(つゝじ)なり。来(こ)し方も躑躅なり。山土(やまつち)のいろもあかく見えたる、あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に帰らむと思ふ時、わが居たる一株の躑躅のなかより、羽音(はあと)たかく、蟲(むし)のつと立ちて頬を掠(かす)めしが、かなたに飛びで、およそ五六尺隔てたる処に礫(つぶて)のありたる其(その)わきにとゞまりぬ。羽をふるふさまも見えたり。手をあげて走りかゝれば、ぱつとまた立ちあがりて、おなじ距離五六尺ばかりのところにとまりたり。其まゝ小石を拾ひあげて狙(ねら)ひうちし、石はそれぬ。蟲はくるりと一ツまはりて、また旧(もと)のやうにぞ居(を)る。追ひかくれば迅(はや)くもまた遁(に)げぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあはひを置きてはキラキラとさゝやかなる羽(は)ばたきして、鷹揚(おうやう)に其(その)二すぢの細き髯(ひげ)を上下(うへした)にわづくりておし動かすぞいと憎(にく)さげなりける。

われは足踏(あしづみ)して心いらてり。其(その)居たるあとを踏みにじりて、「畜生、畜生。」

と呟(つぶや)きざま、躍(をど)りかゝりてハタと打ちし、拳(こぶし)はいたづらに土によごれぬ。

渠(かれ)は一足先なる方(かた)に悠々と羽(は)づくるひす。憎しと思ふ心を籠(こ)めて瞻(みまも)りたれば、蟲は動かずなりたり。つくづく見れば羽蟻(はあり)の形して、それよりもやゝ大(おほい)なる、身はたゞ五彩(ごさい)の色を帯(お)びて青みがちにかゞやきたる、うつくしさいはむ方(かた)なし。

色彩(しきさい)あり光澤(くわうたく)ある蟲は毒なりと、姉上の教へたるをふと思ひ出(い)でたれば、打置(うちお)きてすごすごと引返せしが、足許にさきの石の二ツに砕(くだ)けて落ちたるより俄(にはか)に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒蟲をねらひたり。

このたびはあやまたず、したゝかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴飛ばしたる、石は躑躅のなかをくゞりて小砂利をさそひ、ばらばらと谷深くおちゆく音しき。

袂(たもと)のちり打ちはらひて空を揚げば、日脚(ひあし)やゝ斜(なゝめ)になりぬ。ほかほかとかほあつき日向(ひなた)に唇かわきて、眼のふちより頬のあたりむず痒(がゆ)きこと限りなかりき。

心着(こゝろづ)けば旧来(もとき)し方(かた)にはあらしと思ふ坂道の異なる方(かた)にわれはいつかおりかけ居たり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まはせば、赤土の道幅せまく、うねりうねり果てしなきに、両側つゞきの躑躅の花、遠き方(かた)は前後を塞(ふさ)ぎて、日かげあかく咲込(さきこ)めたる空のいろの眞蒼(まさを)き下(した)に、イ(たゝず)むはわれのみなり。

鎮守の社(ちんじゆのやしろ)

坂は急ならず長くもあらねど、一つ尽(つく)ればまたあらたに顛(あらは)る。起伏(きふく)恰(あたか)も大波の如く打続き、いつ坦(たん)ならむとも見えざりき。

あまり倦(う)みたれば、一ツおりてのぼる坂の窪(くぼみ)に踞(つくば)ひし、手のあきたるまゝ何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さといふ字も出来たり。くといふ字も書きたり。曲りたるもの、直(すぐ)なるもの、心の趣(おもむ)くまゝに落書(らくがき)したり。しかなせるあひだにも、頬のあたり先刻(さき)に毒蟲の触れたらむと覚(おぼ)ゆるが、しきりにかゆければ、袖もてひまなく擦(こす)りぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出来たるを、姉に見せばやと思ふに、俄(にはか)に其(その)顔の見たうぞなりたる。

立あがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあはひも透かで躑躅咲きたり。日影ひとしほ赤うなりまさりたるに、手を見たれば掌(たなそこ)に照りそひぬ。

一文字(いちもんじ)にかけのぼりて、唯(と)見ればおなじ躑躅のだらだらおりなり。走りおりて走りのぼりつ。いつまでか慥(かく)てあらむ、こたびこそと思ふに違(たが)ひて、道はまた蜿(うね)れる坂なり。踏心地柔かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得(え)堪(た)へずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きて居つ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある処(ところ)に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異ならずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あざやかにぱつと茜(あかね)さして、眼もあやに躑躅の花、たゞ紅(くれなゐ)の雪の降積めるかと疑はる。

われは涙の声たかく、あるほど声を絞りて姉をもとめぬ。一(ひと)たび二(ふた)たび三(み)たびして、こたへやすると耳を澄せば、遙(はるか)に瀧(たき)

の音聞こえたり。どうどうと響くなかに、いと高く冴(さ)えたる声の幽(かすか)に、

「もういゝよ、もういゝよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ圖(づ)なることを認め得たる、一声くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やうやう心たしかに其の声したる方(かた)にたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰(み)おろせば、あまり雑作(ざふさ)なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより見えぬ。かくてわれ踏迷(ふみまよ)ひたる紅(くれなゐ)の雪のなかをばのがれつ。背後(うしろ)には躑躅の花飛び飛びに咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一株も花のあかきはなくて、たそがれの色、境内(けいだい)の手洗水(みたらし)のあたりを籠(こ)めたり。柵(さく)結(ゆ)ひたる井戸ひとつ、銀杏(いてふ)の古(ふ)りたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀あり。此方(こなた)は裏木戸のあき地にて、むかひに小さき稲荷の堂あり。石の鳥居あり。木の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鉄の輪を嵌(は)めたるさへ、心たしかに覚えある、こゝよりはハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。たゞひとへにゆふ日照りそひたるつゝじの花の、わが丈(たけ)よりも高き処(ところ)、前後左右を咲埋めたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅(くれなゐ)と、紫と、青白(せいはいく)の光を羽色(はいろ)に帯びたる毒蟲のキラキラと飛びたるさまの広き景色のみぞ、畫(ゑ)の如く小さき胸に爰(こゝ)がかけける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救(すくひ)を姉にもとめしを、渠(かれ)に認められしぞ幸(さいはひ)なる。いふことを肯(き)かで一人いで来しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ。優しき人のなつかしけれど、顔をあはせて謂(い)ひまけむは口惜(くちを)しきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に帰らむとはおもはず。ひとり境内にイ(たゞ)みしに、わつといふ声、笑ふ声、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツまでなる児(こ)の五六人前後(あとさき)に走り出(い)でたり、こはかくれ遊びの一人(いちにん)が見いだされたるものぞとよ。二人三人(みたり)走り来て、わが其処に立てるを見つ。皆瞳を集めしが、

「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勸(すゝ)めぬ。小家あちこち、このあたりに住むは、かたゐといふものなりとぞ。風俗少しく異なれり。子どもが親達の家富みたるも好(よ)き衣(きぬ)着たるはあらず、大抵跣足(はだし)な

り。三味線(さみせん)弾きて折々わが門に来(きた)るもの、溝川に鱧(どぢやう)を捕ふるもの、附木(つけぎ)、草履(ざうり)など鬻(ひさ)ぎに来るものだちは、皆この子どもが母なり、父なり、祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒(いまし)めつ。然(さ)るに町方(まちかた)の者としいへば、かたみなる子ども尊(たふと)び敬(うやま)ひて、頃刻(しばらく)もともに遊ばんとことを希(こひねが)ふや、親しく、優しく勉(つと)めてすなれど、不断は此方(こなた)より遠ざかりしが、其時(そのとき)は先にあまり淋しくて、友欲(ほ)しき念の堪へがたかりし其心のまだ失(う)せざると、恐しかりしあとの楽しきとに、われは拒(こば)まずして頷(うなづ)きぬ。

児(こ)どもはさゞめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返すとて、拳(けん)してさがすものを定めしに、われ其任にあたりたり。面(おもて)を蔽(おほ)へといふまゝにしつ。ひっそとなりて、堂の裏崖をさかさに落つる瀧の音どうどうと松杉の梢(こずえ)ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可(い)いよ、もう可(い)いよ。」

と呼ぶ声、笏(こだま)に響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、たそがれの色また一際(ひときは)襲ひ来れり。大(おほい)なる樹のすくすくとならべるが朦朧(もうろう)としてうすぐらきなかに隠れむとす。

声したる方をお思ふ処には誰も居らず。こゝかしこさがしたれど人らしきものあらざりき。

また旧(もと)の境内の中央に立ちて、もの淋しく瞞(みまは)しぬ。山の奥にも響くべく凄(すさま)じき音して堂の扉を鎖(とざ)す音しつ、闐(げき)としてものも聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき子どもなれば、かゝる機会(おり)を得てわれをば苦めむとや企(たく)みけむ。身を隠したるまゝ密(ひそか)に遁(に)げ去りたらむには、探せばとて獲(え)らるべき。益(やく)もなきことをと不図(ふと)思ひうかぶに、うちすてて踵(くびす)をかへしつ。さるにても萬一(もし)わがみいだすを待ちてあらばいつまでも出(い)でくることを得ざるべし、それもまたはかり難しと、心迷ひて、とつ、おいつ、徒(いたづら)に立ちて困(こう)ずる折しも、何処(いづく)より来たりしとも見えず、暗うなりたる境内の、うつくしく掃(は)いたる土のひろびろと灰色なせるに際(きは)立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍(かたはら)に居て、うつむきざまにわれをば見き。

極(きは)めて丈(たけ)高き女なりし、其手を懐(ふところ)にして肩を垂れたり。優しきこゑにて、

「此方(こちら)へおいで。此方(こちら)。」

といひて前(さき)に立ちて導きたり。見知りたる女(ひと)にあらねど、うつ

くしき顔の笑(ゑみ)をば含みたる、よき人と思ひたれば、怪しまで、隠れたる
児のありかを教ふるとさとりたれば、いそいそと従ひぬ。

あふ魔(ま)が時

わが思ふ処に違(たが)はず、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突あたりに
小さき稻荷の社(やしろ)あり。青き旗、白き旗、二三本其前に立ちて、うしろ
はたゞちに山の裾なる雑樹(ざふき)斜めに生(お)ひて、社の上を蔽(おほ)ひた
る、其下のをぐらき処、孔(あな)の如き空地(くうち)なるをソとめくばせしき。
瞳は水のしたゝるばかり斜(なゝめ)にわが顔を見て動けるほどに、あきらかに
其心ぞ読まれたる。

さればいさゝかもためらはで、つかつかと社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり
冷たき風あり。落葉、朽葉(くちば)、堆(うづたか)く水くさき土のにほひし
たるのみ、人の氣勢(けはひ)もせで、頸(えり)もとの冷(ひやゝ)かなるに、と
胸をつきて見返りたる、またゝくまと思ふ彼の女(ひと)はハヤ見えざりき。何
方(いづかた)にか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はずあなや(=口ヘンに阿と、呀との二字)と叫びぬ。

人顔(ひとがほ)のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅
には、怪しきもの居て人を惑はすと、姉上の教へしことあり。

われは茫然(ぼうぜん)として眼(まなこ)をみは(=目ヘンに争の字)りぬ。足
ふるひたれば動きもならず、固くなりて立ちすくみたる、左手(ゆんで)に坂あ
り。穴の如く、其底よりは風の吹き出づると思ふ黒闇々(こくあんあん)たる坂
下より、ものののぼるやうなれば、こゝにあらば捕へられむと恐しく、とかう
の思慮もなさで社の裏の狭きなかになにげ入(い)りつ。眼を塞(ふさ)ぎ、呼吸(い
き)をころしてひそみたるに、四足(よつあし)のものの歩むけはひして、社の
前を横ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさ
きの女(ひと)のうつくしかりし顔、優(やさし)かりし眼を忘れず。こゝをわれ
に教へしを、今にして思へばかくれたる子どものありかにあらで、何等(なん
ら)か恐しきもののわれを捕へむとするを、こゝに潜(ひそ)め、助かるべしと
て、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提灯(こ
ぢやうちん)の火影(ほかげ)あかきが坂下より急ぎのぼりて彼方(かなた)に走
るを見つ。ほどなく引返してわがひそみたる社の前に近づきし時は、一人なら
ず二人三人(みたり)連立(つれだ)ちて来(きた)りし感あり。

恰(あたか)も其立留りし折から、別なる蹠音(あしおと)、また坂をのぼりて
さきのものと落合ひたり。

「おいおい分らないか。」

「ふしぎだな、なんでも此邊で見たといふものがあるんだが。」

とあとよりいひたるはわが家につかひたる下男(げなん)の声に似たるに、あはや出でむとせしが、恐しきものの然(さ)はたばかりて、おびき出(いだ)すにやあらむと恐しさは一しほ増しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃(たんぼ)の方でも廻つて見よう、お前も頼む。」

「それでは。」といひて上下(うへした)にばらばらと分れて行く。

再び寂(せき)としたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手をかけて眼ばかりと思ふ顔少し差出だして、外(と)の方(かた)をうかゞふに、何ごともあらざりければ、やゝ落着きたり。怪しきものども、何とてやはわれをみいだし得む、愚(おろか)なる、と冷(ひやゝ)かに笑ひしに、思ひがけず、誰(たれ)ならむたまぎる声して、あわてふためき遁(に)ぐるがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の声なりき。

大沼

「居ないって私(わたし)あ何(ど)うしよう、爺(ぢい)や。」

「根ッから居(ゐ)さつしやらぬことはござりますまいが、日は暮れまする。何せい、御心配なこんでござります。お前様遊びに出します時、帯の結(むすび)めを丁(とん)とたゝいてやらつしやれば好(よ)いに。」

「あゝ、いつもはさうして出してやるのだけれど、けふはお前私にかくれてそつと出て行つたらうではないかねえ。」

「それはハヤ不念(ぶねん)なこんだ。帯の結(むすび)めさへ叩いときや、何がそれで姉様(あねさま)なり、母(おふくろ)様なりの魂が入るもんだで魔(エテ)めは何(ど)うすることもしえないでござす。」

「さうねえ。」ともものかなしげに語らひつゝ、社の前をよこぎりたまへり。

走りいでしが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪(あやし)みたる。

悔(く)ゆれど及ばず、かなたなる境内の鳥居のあたりまで追ひかけたれど、早や其姿は見えざりき。

涙ぐみてイ(たゝず)む時、ふと見る銀杏(いてふ)の木のくらき夜の空に、大(おほい)なる圓(まる)き影して茂れる下に、女(をんな)の後姿ありてわが眼(まなこ)を遮(さへぎ)りたり。

あまりよく似たれば、姉上と呼ばむとせしが、よしなきものに声かけて、な

まじひにわが此処(こゝ)にあるを知られむは、拙(つたな)きわざなればと思ひてやみぬ。

とばかりありて、其姿またかくれ去りつ。見えずなればなほなつかしく、たとへ恐しきものなればとて、かりにもわが優しき姉上の姿に化(け)したる上は、われを捕へてむごからむや。さきなるは然(さ)もなく、いま幻に見えたるがまこと其人なりけむもわかざるを、何とて言(ことば)はかけざりしと、打泣(うちな)きしが、かひもあらず。

あはれさまさまのものの怪しきは、すべてわが眼(まなこ)のいかにかせし作用なるべし、さらずば涙にくもりしや、術(すべ)こそありけれ、かなたなる御手洗(みたらし)にて清めてみばやと寄りぬ。

煤(すす)けたる行燈(あんどう)の横長きが一つ上にかゝりて、ほとゞぎすの畫(ゑ)と句など書いたり。灯(ひ)をともしたるに、水はよく澄みて、青き苔むしたる石鉢の底もあきらかなり。手に掬(むす)ばむとしてうつむく時、思ひかけず見たるわが顔はそもそもいかなるものぞ。覚えず叫びしが心を籠めて、気を鎮(しづ)めて、両の眼(まなこ)を拭(ぬぐ)ひ拭ひ、水に臨(のぞ)む。

われにもあらでまたとは見るに忍(しの)びぬを、いかでわれかゝるべき、必ず心の迷へるならむ、今こそ、今こそとわなゞきながら見直したる、肩をとらへて声ふるはし、

「お、お、千里(ちさと)。えゞも、お前は。」と姉上ののたまふに、縋(すが)りつかまきみかへりたる、わが顔を見たまひしが、

「あれ!」

といひて一足(ひとあし)すきりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいはずてに衝(つ)と馳(は)せ去りたまへり。

怪しき神のさまさまのことしてなふるわと、あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつゞ、ひたばしりに追ひかけぬ。捕へて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらものの口惜(くちを)しければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大路(おほみち)と覚(おぼ)しき町にも出でたり、暗き径(こみち)も辿(たど)りたり、野もよこぎりぬ。畦(あぜ)も越えぬ。あとをも見ずて駈(か)けたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河の如く横(よこた)はりて、黒き、恐しき森四方をかこめる、大沼とも覚しきが、前途(ゆくて)を塞(ふさ)ぐと覚ゆる蘆の葉の繁きがなかにわが身体(からだ)倒れたる、あとは知らず。

五位鷺(ごみさぎ)

眼(め)のふち清々(すがすが)しく、涼しき薫(かをり)つよく薫ると心着(こゝろづ)く、身は柔かき蒲団(ふとん)の上に臥(ふ)したり。やゝ枕をもたげて見る、竹縁(ちくえん)の障子あけ放(はな)して、庭つゞきに向ひなる山懐(やまふところ)に、緑の草の、ぬれ色青く生茂(おひしげ)りつ。其半腹(はんぷく)にかゝりある巖角(いわかど)の苔のなめらかなるに、一挺(いつちやう)はだか蠟(らふ)に灯ともしたる灯影(ほかげ)すゞしく、篋(かけひ)の水むくむくと湧きて玉ちるあたりに盥(たらひ)を据(す)ゑて、うつくしく髪結(かみゆ)うたる女(ひと)の、身に一絲(いつし)もかけて、むかうざまにひたりて居たり。

篋(かけひ)の水は其たらひに落ちて、溢(あふ)れにあふれて、地の窪(くぼ)みに流るゝ音しつ。

蠟(らふ)の灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて、ちらちらと眼に映ずる雪なす膚(はだへ)白かりき。

わが寝返る音に、ふと此方(こなた)を見返り、それと頷く状(さま)にて、片手をふちにかけてゝ片足を立てて盥(たらひ)のそとにいだせる時、颯(さ)と音して、鳥よりは小さき鳥の真白(ましろ)きがひらひらと舞ひおりて、うつくしき人の脛(はぎ)のあたりをかすめつ。其まゝおそれげもなう翼(つばさ)を休めたるに、ざぶりと水をあびせざま莞爾(につこ)とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣(きぬ)もて其胸をば蔽(おほ)へり。鳥はおどろきてはたはたと飛び去りぬ。

夜の色は極めてくらし、蠟(らふ)を取りたるうつくしき人の姿さやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに縁(えん)の端に腰をおろすとともに、手をつきそらして挨拶(ねじむ)きざま、わがかほをば見つ。

「気分は癒(なほ)つたかい、坊や。」

といひて頭(かうべ)を傾けぬ。ちかまさりせる面(おもて)けだかく、眉あざやかに、瞳すゞしく、鼻やゝ高く、唇の紅(くれなゐ)なる、額(ひたひ)つき頬のあたり臍(らふ)たけたり。こは豫(かね)てわがよしと思ひ詰(つめ)たる雛のおもかげによく似たれば貴(たふと)き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人(しりびと)にはあらざれど、はじめて逢ひし方(かた)とは思はず、さりや、誰にかあるらむとつくづくみまもりぬ。

またほゝゑみたまひて、

「お前あれは斑猫(はんめう)といつて大変な毒蟲なの。もう可(い)いね、まるでかはつたやうにうつくしくなつた、あれでは姉様(ねえさん)が見違へるのも無理はないのだもの。」

われも然(さ)あらむと思はざりしにもあらざりき。いまはたしかにそれよと疑はずなりて、のたまふまゝに頷きつ。あたりのめづらしければ起きむとする

夜着(よぎ)の肩、ながく柔かにおさへたまへり。

「ぞつとしておいで、あんばいがわるいのためから、落着いて、ね、気をしづめるのだよ、可(い)いかい。」

われはさからはで、たゞ眼をもて答へぬ。

「どれ。」といひて立つたる折、のしのしと道芝(みちしば)を踏む音して、つゞれをまとうたる老夫(おやぢ)の、顔の色いと赤きが縁近う入り来つ。

「はい、これはお児さまがござらつせえたの、可愛いお児ぢや、お前様も嬉しかる。はゞ、どりや、またいつものを頂きましょか。」

腰をなゝめにうつむきて、ひつたりとかの筧に顔をあて、口をおしつけてごつごつとたてつゞけにのみたるが、ふつといきを吹きて空を仰(あふ)ぎぬ。

「やれやれ甘(うま)いことかな。はい、参ります。」

と踵(くびす)を返すを、此方より呼びたまひぬ。

「ぢいや、御苦労だが。また来ておくれ、この児を返さねばならぬから。」

「あいあい。」

と答へて去る。山風颯(さつ)とおろして、彼(か)の白き鳥また翔(た)ちおりつ。黒き盥のふちに乗りて羽(は)づくろひして静まりぬ。

「もう、風邪を引かないやうに寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静に雨戸をひきたまひき。

九ツ餅(こゝのつこだま)

やがて添臥(そひぶし)したまひし、さきに水を浴(あ)びたまひし故(ゆゑ)にや、わが膚をりをり慄然(りつぜん)たりしが何(なん)の心もなうひしと取縄(とりすが)りまゐらせぬ。あとをあとをといふに、をさな物語二ツ三ツ聞かせ給ひつ。やがて、

「一ツ餅(こだま)、坊や、二ツ餅といへるかい。」

「二ツ餅。」

「三(み)ツ餅、四(よ)ツ餅といつて御覧。」

「四ツ餅。」

「五ツ餅。そのあとは。」

「六(む)ツ餅。」

「さうさう七ツ餅。」

「八(や)ツ餅。」

「九ツ餅　こゝはね、九ツ餅といふ処なの。さあもうおとなにして寝るんです。」

背に手をかけ引寄せて、玉の如き其(その)乳房をふくませたまひぬ。露(あ

らは)に白き襟(えり)、肩のあたり鬢(びん)のおくれ毛はらはらとぞみだれたる、かゝるさまは、わが姉上とは太(いた)く違へり。乳をのまむといふを姉上は許したまはず。

ふところをかいさぐれば常に叱りたまふなり。母上みまかりたまひてよりこのかた三年(みとせ)を経(へ)つ。

乳(ち)の味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似ざりき。垂玉(すゐぎよく)の乳房たゞ淡雪(あはゆき)の如く含むと舌にきえて触(ふ)るゝものなく、すゞしき唾(つば)のみぞあふれいでたる。

軽く背(せな)をさすられて、われ現(うつゝ)になる時、屋の棟、天井の上と覚(おぼ)し、凄(すさ)まじき音してしばらくは鳴りも止まず。こゝにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わなゝき取(とり)つくを抱きしめつゝ、

「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍(かんにん)しておくれよ、いけません。」

とキとのたまへば、やがてぞ静まりける。

「恐くはないよ。鼠だもの。」

とある、さりげなきも、われはなほ其響(そのひゞき)のうちにももの叫びたる声せしが耳に残りてふるへたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまひて、とある蒔繪(まきゑ)ものの手箱のなかより、一口(ひとふり)の守刀(まもりがたな)を取出しつゝ鞘(さや)ながら引(ひき)そばめ、雄々(をゝ)しき声にて、

「何が来てももう恐くはない、安心してお寝よ。」とのたまふ、たのもしき状(さま)よと思ひてひたと其胸にわが顔をつけたるが、ふと眼をさましぬ。残燈(ありあけ)暗く床柱の黒うつやゝかにひかるあたり薄き紫の色籠めて、香(かう)の薫(かをり)残りたり。枕をはづして顔をあげつ。顔に顔をもたせてゆるく閉(とぢ)たまひたる眼の睫毛(まつげ)かぞふるばかり、すやすやと寝入りて居たまひぬ。ものいはむとおもふ心おくれて、しばし瞻(みまも)りしが、淋しさにたへねばひそかに其唇に指さきをふれて見ぬ。指はそれて唇には届かでなむ、あまりよくねむりたまへり。鼻をやつままむ眼をやおさむとまたつくづくと打(うち)まもりぬ。ふと其鼻頭(はなさき)をねらひて手をふれしに空(くう)を捻(ひね)りて、うつくしき人は雛(ひな)の如く顔の筋ひとつゆるみもせざりき。またその眼のふちをおしたれど水晶のなかなるものの形を取らむとするやう、わが顔は其おくれげのはしに頬(ほゝ)をなでらるゝまで近々とありながら、いかにしても指さきは其顔に届かざるに、はては心いれて、乳(ち)の下に面(おもて)をふせて、強く額(ひたひ)もて圧(お)したるに、顔にはたゞあたゝかき霞(かすみ)のまとふとばかり、のどかにふはふはとさはりしが、薄葉(うすえふ)一重(ひとへ)の支(さゝ)ふるなく着(つ)けたる額はつと下に落ち沈むを、

心着(づ)けば、うつくしき人の胸は、もとの如く傍(かたはら)にあをむき居て、わが鼻は、いたづらにおのが膚にぬくまりたる、柔き蒲団(ふとん)に埋(うも)れて、をかし。

渡船(わたしぶね)

夢幻(ゆめまぼろし)ともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまひし元(もと)のまま柔かに力なげに蒲団のうへに垂れたまへり。

片手をば胸にあてて、いと白くたをやかなる五指(ごし)をひらきて黄金(わうごん)の目貫(めぬき)キラキラとうつくしき鞘(さや)の塗(ぬり)の輝きたる小さき守刀(まもりがたな)をしかと持つともなく乳(ち)のあたりに落して据(す)ゑたる、鼻たかき顔のあをむきたる、唇のものいふ如き、閉ぢたる眼のほゝ笑む如き、髪(かみ)のさらさらしたる、枕(まくら)にみだれかゝりたる、それも違(たが)はぬに、胸に剣(つるぎ)をさへのせたまひたれば、亡き母上の爾時(そのとき)のさまに紛(まが)ふべくも見えずなむ、コハこの君もみまかりしよとおもふいまはしさに、はや取除(とりの)けなむと、胸なる其守刀に手をかけて、つと引く、せつばゆるみて、青き光眼(まなこ)を射たるほどこそあれ、いかなるはずみにか血汐(ちしほ)さとほとばしりぬ。眼もくれたり。したしたとながれにじむをあなやと両(りやう)の拳(こぶし)もてしかとおさへたれど、留(とど)まらで、たふたふと音するばかりぞ淋漓(りんり)としてながれつたへる、血汐のくれなゐ衣(きぬ)をそめつ。うつくしき人は寂(せき)として石像の如く静なる鳩尾(みづおち)のしたよりしてやがて半身をひたし尽(つく)しぬ。おさへたるわが手には血の色つかぬに、燈(ともしび)にすかす指のなかの紅(くれなゐ)なるは、人の血の染(そ)みたる色にはあらず、訝(いぶか)しく撫(な)で試(こゝろ)むる掌(たなそこ)の其(その)血汐にはぬれもこそせぬ、こゝろづきて見定(みさだ)むれば、かいやりし夜のものあらはになりて、すゞしの絹をすきて見ゆる其膚(はだ)にまとひたまひし紅(くれなゐ)の色なりける。いまはわれにもあらで声高(こわだか)に、母上、母上と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動かし、おしうごかししたりしが、効(かひ)なくてなむ、ひた泣きに泣く泣くいつのまにか寝たりと覚(おぼ)し。顔あたゝかに胸をおさるゝ心地に眼覚めぬ。空青く晴れて日影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫(をぢ)の背(せな)に負(お)はれて、とある山路(やまぢ)を行(ゆ)くなりけり。うしろよりは彼(か)のうつくしき人したがり来ましぬ。

さてはあつらへたまひし如く家に送りたまふならむと推(おし)はかるのみ、

わが胸の中(うち)はすべて見すかすばかり知りたまふやうなれば、わかれの惜しきも、ことのいぶかしきも、取出(とりい)でていはむは益(やく)なし。教ふべきことならむには、彼方(かなた)より先んじてうちいでこそしたまふべけれ。

家に帰るべきわが運ならば、強ひて止(とゞ)まらむと乞(こ)ひたりとて何かせん、さるべきいはれあればこそ、と大人(おとな)しう、ものもいはでぞ行く。

断崖(だんがい)の左右に聳(そび)えて、点滴声する処ありき。雑草高き径(こみち)ありき。松柏(まつかしは)のなかを行く処もありき。きゝ知らぬ鳥うたへり。褐色(かつしよく)なる獣(けもの)ありて、をりをり叢(くさむら)に躍(をど)り入(い)りたり。ふみわくる道とにもあらざりしかど、去年(こぞ)の落葉道を埋(うづ)みて、人多く通(かよ)ふ所としも見えざりき。

をぢは一挺(いつちやう)の斧(をの)を腰にしたり。れいによりてのしのしとあゆみながら、茨(いばら)など生(お)ひしげりて、衣(きぬ)の袖をさへぎるにあへば、すかすかと切つて払ひて、うつくしき人を通し参らす。されば山路(やまみち)のなやみなく、高き塗下駄の見えがくれに長き裾さばきながら来たまひつ。

かくて大沼の岸に臨(のぞ)みたり。水は漫々として藍(らん)を湛(たゞ)へ、まばゆき日のかげも此処(こゝ)の森にはさゝで、水面(すみめん)をわたる風寒く、颯々(さつさつ)として声あり。をぢはこゝに来てソとわれをおろしつ。はしり寄れば手を取りて立ちながら肩を抱(いだ)きたまふ、衣の袖左右より長くわが肩にかゝりぬ。

蘆間(あしま)の小舟(をぶね)の纜(ともづな)を解きて、老夫(をぢ)はわれをかゝへて乗せたり。一緒ならではと、しばしむづかりたれど、めまひのすればとて乗りたまはず、さらばとのたまふはしに棹(さを)を立てぬ。船は出でつ。わつと泣きて立上りしがよるめきてしりみに倒れぬ。舟といふものにははじめで乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後(うしろ)に居たまへりとおもふ人の大(おほい)なる環(わ)にまはりて前途(ゆくて)なる汀(みぎは)に居たまひき。いかにして渡し越したまひつらむと思ふときハヤ左手(ゆんで)なる汀(みぎは)に見えき。見る見る右手(めて)なる汀(みぎは)にまはりて、やがて旧(もと)のうしろに立ちたまひつ。箕(み)の形したる大(おほい)なる沼は、汀の蘆と、松の木と、建札(たてふだ)と、其傍(そのかたはら)なるうつくしき人ともろともに緩(ゆる)き環を描(えが)いて廻転し、はじめは徐(おもむ)ろにまはりしが、あとあと急になり、疾(はや)くなりつ、くるくるくるくと次第にこまかくまはるまはる、わが顔と一尺ばかりへだたりたる、まぢかき処に松の木にすがりて見えたまへる、とばかりありて眼の前(さき)にうつくしき顔の臍(らふ)たけたるが莞爾(につこ)とあでやかに笑みたまひしが、そののちは見えざりき。蘆は繁く丈よりも高き汀(みぎは)に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

をぢはわれを扶(たす)けて船より出(い)だしつ。また其背(せな)を向けたり。「泣くでねえ泣くでねえ。もうぢきに坊ツさまの家(うち)ぢや。」と慰めぬ。かなしさはそれにはあらねど、いふもかひなくてたゞ泣きたりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿の如くうちかけらるゝやう肩に負はれて、顔を垂れてぞともなはれし。見覚えある板塀のあたりに来て、日のやゝくれかゝる時、老夫(をぢ)はわれを抱(いだ)き下して、溝(みぞ)のふちに立たせ、ほくほく打(うち)ゑみつゝ、慇懃(いんぎん)に会釈(えしやく)したり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」

といひずてに何地(いづち)ゆくらむ。別れはそれにも惜しかりしが、あと追ふべき力もなくて見おくり果てつ。指(さ)す方(かた)もあらでありくともなく歩(ほ)をうつすに、頭(かしら)ふらふらと足の重たくて行悩(ゆきなや)む、前に行くも、後ろに帰るも皆見知越(みしりごし)のものなれど、誰(たれ)も取りあはむとはせで往(ゆ)きつ来(きた)りつす。さるにてもなほものありげにわが顔をみつゝ行くが、冷(ひやゝ)かに嘲(あざけ)るが如く憎さげなるぞ腹立(はらだた)しき。おもしろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向直(むきなほ)りて、とぼとぼとまた山ある方にあるき出(いだ)しぬ。

けたゝましき跽音(あしおと)して驚摑(わしづかみ)に襟(えり)を掴むものあり。あなやと振返ればわが家(いへ)の後見(うしろみ)せる奈四郎(なしろう)といへる力逞(たく)ましき叔父の、凄(すさ)まじき気色(けしき)して、

「つまゝれめ、何処(どこ)をほつつく。」と喚(わめ)きざま、引立(ひつた)てたり。また庭に引出(ひきいだ)して水をやあびせられむかと、泣叫びてふりもぎるに、おさへたる手をゆるべず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背を拍(う)ちて宙につるしながら、走りて家に帰りつ。立騒ぐ召(めし)つかひどもを叱りつも細引(ほそびき)を持って来(こ)さして、しかと両手をゆるはへあへず奥まりたる三畳の暗き一室(ひとま)に引立(ひつた)てゆきて其まゝ柱に縛(いまし)めたり。近く寄れ、喰(くひ)さきなむと思ふのみ、齒がみして睨(にら)まへたる、眼の色こそ怪(あや)しくなりたれ、逆(さか)つりたる眦(まなじり)は憑(つ)きもののわざよとて、寄りたかりて口々にのゝしるぞ無念なりける。

おもての方さゝめきて、何処(いづく)にか行き居れる姉上帰りましつと覚(おぼ)し、襖(ふすま)いくつかぱたぱたと音して八ヤこゝに来たまひつ。叔父は室(しつ)の外にさへぎり迎へて、

「ま、やつと取返したが、縄を解いてはならんぞ。もう眼が血走つて居て、すきがあると駈け出すぢや。魔(エテ)どのがそれしよびくでの。」

と戒(いまし)めたり。いふことよくわが心を得たるよ、然り、隙(ひま)だにあらむにはいかでかこゝにとゞまるべき。

「あ。」とばかりにいらへて姉上はまるび入(い)りて、ひしと取着きたまひぬ。ものはいはでさめざめとぞ泣きたまへる、おん情(なさけ)手にこもりて抱(いだ)かれたるわが胸絞らるゝやうなりき。

姉上の膝に臥(ふ)したるあひだに、医師来(きた)りてわが脈(みやく)をうかゞひなどしつ。叔父は医師とともに彼方(あなた)に去りぬ。

「ちさや、何(ど)うぞ気をたしかにもつておくれ。もう姉様(ねえさん)は何(ど)うしようね。お前、私(わたし)だよ。姉さんだよ。ね、わかるだらう、私だよ。」

といきつくづくちつとわが顔を見まもりたまふ、涙痕(るゐこん)したゝるばかりなり。

其心の安んずるやう、強(し)ひて顔つくりてニツコと笑(わら)うて見せぬ。

「おゝ、薄気味(うすきみ)が悪いねえ。」

と傍(かたはら)にありたる奈四郎の妻なる人呟(つぶや)きて身ふるひしき。

やがてまた人々われを取巻きてありしことども責むるが如くに問ひぬ。くはしく語りて疑(うたがひ)を解かむとおもふに、をさなき口の順序正しく語るを得むや、根問(ねど)ひ、葉問(はど)ひするに一々説明(ときあ)かさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつゝ心に何をかいひたる。

やうやくいましめはゆるされたれど、なほ心の狂ひたるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信ぜられず、すること皆人(みなひと)の疑を増すをいかにせむ。ひしと取籠(とりこ)めて庭にも出(いだ)さで日を過(すご)しぬ。血色わくくなりて瘦(や)せもしつとて、姉上のきづかひたまひ、後見(うしろみ)の叔父夫婦にはいとせめて秘(かく)しつゝ、そとゆふぐれを忍びて、おもての景色見せたまひしに、門辺(かどべ)にありたる多くの子ども我が姿を見ると、一斉(いつせい)に、アレさらはれものの、気狂(きちがひ)の、狐つきを見よやといふいふ、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不断親(おや)しかりし朋達(ともだち)なり。

姉上は袖もてわれを庇(かば)ひながら顔を赤うして遁(に)げ入りたまひつ。人目なき処にわれを引据(ひきよ)つと見るまに取つて伏せて、打ちたまひぬ。

悲しくなりて泣出せしに、あわたゞしく背(せな)をばさすりて、

「堪忍(かんにん)しておくれよ、よ、こんなかはいさうなものを。」

といひかけて、

「私(わたし)あもう気でも違ひたいよ。」としみじみと搔口説(かきくど)きたまひたり。いつのわれにはかはらじを、何とてさはあやまるや、世にたゞ一人

なつかしき姉上までわが顔を見るごとに、氣を確(たしか)に、心を鎮(しづ)めよ、と涙ながらいはるゝにぞ、さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむやう其毎(そのたび)になりまさりて、果(はて)はまことにものくるはしくもなりもてゆくなる。

たとへば怪(あや)しき絲の十重二十重(とへはたへ)にわが身をまとふ心地しつ。しだいしだいに暗きなかに奥深くおちいりてゆく思(おもひ)あり。それをば刈払(かりはら)ひ、遁出(のがれい)でむとするに其術(そのすべ)なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉を顰(ひそ)め、嘲(あざけ)り、笑ひ、卑(いや)しめ、罵(のゝし)り、はた悲み憂ひなどするにぞ、氣あがり、心激(げき)し、たゞじれにじれて、すべてのもの皆われをほらだたしむ。

口惜しく腹立たしきまゝ身の周囲(まはり)はことごとく敵(かたき)ぞと思はるゝ。町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何等(なんら)のものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見て其弟を忘れしことあり。塵(ちり)一つとしてわが眼に入(い)るは、すべてものの化(け)したるにて、恐しきあやしき神のわれを悩まさむとて現(げん)じたるものならむ。さればぞ姉がわが快復を祈る言(ことば)もわれに心を狂はすやう、わざと然(さ)はいふならむと、一たびおもひては堪(た)ふべからず、力あらば恣(ほしいまゝ)にともかくもせばやせよかし、近づかば喰ひさきくれむ、蹴飛ばしやらむ、搔(かき)むしらむ、透(すき)あらばとびいでて、九ツ罍(こだま)とをしへたる、たふときうつくしきかのひとの許(もと)に遁(に)げ去らむと、胸の湧きたつほどこそあれ、ふたゝび暗室(あんしつ)にいましめられぬ。

千呪陀羅尼(せんじゆだらに)

毒ありと疑へばものも食はず、薬もいかでか飲まむ、うつくしき顔したりとて、優しきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとしいへば、たけりくるひ、罵(のゝし)り叫びてあれたりしが、つひには声も出(い)でず、身も動かず、われ人をわきまへず心地死ぬべくなれりしを、うつらうつら昇(か)きあげられて高き石壇(いしだん)をのぼり、大(おほい)なる門を入(い)りて、赤土の色きれいに掃きたる一條(ひとすじ)の道長き、右左、石燈籠と石榴(ざくろ)の樹の小さきと、おなじほどの距離にかはるがはる続(つゞ)きたるを行きて、香(かう)の薫(かをり)しみつきたる太き圓柱(まるばしら)の際(きは)に寺の本堂に据ゑられつ、ト思ふ耳のはたに竹を破(わ)る響(ひび)きこえて、僧ども五三人一斉に声を揃へ、高らかに誦(じゆ)する声耳を聳(ろう)するばかり喧(か)しまし堪(た)ふべからず、禿鬚(とくろ)ならび居る木のはしの法師ばら、何をかすると、拳(こぶし)をあげて一

人(いちにん)の天窓(あたま)をうたむとせしに、一幅(ひとはゞ)の青き光颯(さつ)と窓を射て、水晶の念珠(ねんじゆ)瞳をかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひるみて踞(うづく)まる時、若僧(じやくそう)圓柱(えんちゆう)をいざり出(い)でつゝ、つい居て、サラサラと金欄(きんらん)の帳(とばり)を絞る、燦爛(さんらん)たる御厨子(みづし)のなかに尊(たふと)き像(すがた)こそ拝まれたれ。一段高まる経の声、トタンにはたゝがみ天地に鳴りぬ。

端巖微妙(たんげんみめう)のおんかほばせ、雲の袖、霞の袴(はかま)ちらちらと瓔珞(えうらく)をかけたまひたる、玉なす胸に纖手(せんしゆ)を添へて、ひたと、をさなごを抱(いだ)きたまへるが、仰(あふ)ぐ仰ぐ瞳うごきて、ほゝゑみたまふと、見たる時、やさしき手のさき肩にかゝりて、姉上は念じたまへり。

瀧や此堂にかゝるかと、折しも雨の降りしきりつ。渦(うづま)いて寄する風の音、遠き方(かた)より呻(うな)り来て、どつと満山(まんざん)に打あたる。

本堂青光(あおびかり)して、はたゝがみ堂の空をまるびゆくに、たまぎりつゝ、今は姉上を頼までやは、あなやと膝にはひあがりて、ひしと其胸を抱(いだ)きたれば、かゝるものをふりすてむとはしたまはで、あたゝかき腕(かひな)はわが背(せな)にて組合はされたり。さるにや気も心もよわよわとなりもてゆく、ものを見る明(あきら)かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降(ふきぶ)りのなかに陀羅尼(だらに)を呪(じゆ)する聖(ひじり)の声々(こゑごゑ)さわやかに聞きとられつ。あはれに心細くもの凄(すご)きに、身の置処(おきどころ)あらずなりぬ。からだひとつ消えよかしと両手を肩に縋(すが)りながら顔もて其胸を押しわけたれば、襟(えり)をば搔(か)きひらきたまひつゝ、乳(ち)の下にわがつむり押入れて、両袖を打かさねて深くわが背を蔽(おほ)ひ給へり。御佛(みほとけ)の其(その)をさなごを抱(いだ)きたまへるも斯(か)くこそと嬉しきに、おちゐて、心地すがすがしく胸のうち安く平らになりぬ。やがてぞ呪(じゆ)もはてたる。雷(らい)の音も遠ざかる。わが背(せ)をしかと抱(いだ)きたまへる姉上の腕(かひな)もゆるみたれば、ソと其懐(ふところ)より顔をいだしてこはごは其顔をば見上げつ。うつくしさはそれにもかはらでなむ、いたくもやつれたまへりけり。雨風のなほはげしく外(おもて)をうかゞふことだにならざる、静まるを待てば夜(よ)もすから暴通(あれとほ)しつ。家に帰るべくもあらねば姉上は通夜(つや)したまひぬ。其一夜(そのいちや)の風雨(ふうう)にて、くるま山の山中(さんちゆう)、俗(ぞく)に九ツ罍(こゝのつこだま)といひたる谷、あけがたに杣(そま)のみいだしたるが、忽(たちま)ち淵(ふち)になりぬといふ。

里の者、町の人皆拳(こぞ)りて見にゆく。日を経(へ)てわれも姉上とともに来り見き。其日一天(いつてん)うらゝかに空の色も水の色も青く澄みて、軟風(なんふう)おもむろに小波(さゝなみ)わたる淵(ふち)の上には、塵(ちり)一葉

(ひとは)の浮べるあらで、白き鳥の翼(つばさ)広きがゆたかに藍碧(らんぺき)なる水面を横ざりて舞へり。

すさまじき暴風雨(あらし)なりしかな。此谷もと薬研(やげん)の如き形したりきとぞ。

幾株(いくかぶ)となき松柏の根こそぎになりて谷間に吹倒(ふきたふ)されしに山腹(さんぷく)の土落ちたまりて、底をながるゝ谷川をせきとめたる、おのづからなる堤防(ていぼう)をなして、凄まじき水をば湛(たゝ)へつ。一(ひと)たびこのところ決潰(けつくわい)せむか、城(じやう)の端(はな)の町は水底(みなそこ)の都となるべしと、人々の恐れまどひて、怠らず土を装(も)り石を伏せて堅(かた)き堤防を築(きづ)きしが、恰(あたか)も今の關谷少将(せきやせうしやう)の夫人姉上十七の時なれば、年つもりて、嫩(ふたば)なりし常磐木(ときはぎ)もハヤ丈のびつ。草生(お)ひ、苔むして、いにしへよりかゝりけむと思ひ紛(まが)ふばかりなり。

あはれ礫(つぶて)を投(とう)ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、血氣(けつき)なる友のいたづらを叱り留(とゞ)めつ。年若く面(おもて)清き海軍の少尉候補生(せうゐこうほせい)は、薄暮(はくぼ)暗碧(あんぺき)を湛(たゝ)へたる淵に臨(のぞ)みて肅然(しゆくぜん)とせり。